

## 台湾客家八音にみる儀礼的感情とその行方

田井 みのり

### 一 はじめに

中国大陸や台湾の伝統音楽である八音は、神祇祭祀や祖先祭祀、結婚式、葬式での演奏を担い、客家の人びとの生活における折々の感情と密接に結びついてきたといわれる。しかし、近年では様々な社会変化のなかで、八音の演奏はその録音や西洋の音楽、また日本の歌謡曲などの演奏に取って代わられている。さらに担い手の高齢化も相俟って八音楽団自体の減少もみられる。こうした状況にある八音だが、中国や台湾の広範な地域において祭祀の中心となる音楽であるにもかかわらず、日本においては人類学・民俗学的な研究が管見の限りなされていない。

そこで本稿では、台湾の研究者によって書かれた先行研究を踏まえながら台湾客家の八音の概要、儀礼における感情的な表現というその特性について述べるとともに、実際に現地で聞いた人びとの八音とその変化に対する意識を提示する。

本調査報告は9月5日から12日にかけて台湾中部の石崗区および南部の美濃・屏東で実施したフィールドワークによるものである。今回の調査では、鍾聰明屏東縣八音協會、溫福仁客家八音、林作長八音団の演奏を聴く機会に恵まれた（写真1、2、3）。そのため、以下の報告は演奏の観察と、八音の専門家とそうではない人双方の語りに基づいている。



写真1 美濃客家文物館での溫福仁客家八音の演奏（2022年9月9日、筆者撮影）



写真3 美濃客家文物館での林作長八音団の演奏（2022年9月9日、筆者撮影）



写真2 屏東の楊家での演奏。屏東八音協会の楽団による山歌の演奏の様子（2022年9月11日、田井撮影）

## 二 台湾客家八音の概要

八音の由来については諸説あるが、概ねどの文献でも一致しているのは、「八音」とは、古代中国における楽器の分類だということである。『中國音樂史』[蕭興華 1998] の記述によると西周王朝（紀元前 11 世紀から紀元前 771 年）の頃には既に 70 種類以上の楽器があり、新しい楽器が増えるにつれ、それを分類する必要が生じた。そこで楽器の材料によって

「金、石、土、革、絲、木、匏、土」の8種類に分けたという<sup>1</sup>。

表1 台湾客家八音の演奏機会

月日（特記がない限り旧暦）	機会
1/1	春節
1/15	元宵節
4/5 前後(新暦)	清明節
5/5	端午節
7/15	中元節
9/9	重陽節
12/22(新暦)	冬至

こうした歴史を持つ八音は、台湾と中国大陸全域で見られるが、他方では客家伝統文化の主要な構成要素の1つとみなされ、「客家八音」と呼ばれている。客家八音は客家山歌と並び客家音楽の代名詞的存在でもある。客家八音は、冠婚葬祭の際に欠かせないものであり、人びとの暮らしに根付いて行われてきた。台湾の客家八音の主な演奏機会として挙げられるのは、結婚式、葬儀、誕生日（做壽）、廟の祭（廟會）、神の生誕祭（神明生日）などであるが、今回の調査では、結婚式や葬儀以外では、表1の機会に八音が演奏されることを聞き、多様な場面で求められていることが窺えた。それは台湾客家の様々な儀礼の中核となり、神々や祖先に供物を捧げ敬意を示す「三献礼（三獻禮）」の進行において、八音が主要な役割を担っていることと関係があると考えられる [柯 2005]。

一方、台湾の客家八音の演奏機会や形態には地域差が見られる。台湾の南部と北部を比較した時に、南部の方が八音の演奏が盛んであり、伝統的な形での実践が残っているということは、今回の調査においてよく聞かれた。台湾の南部の中でも、特に美濃や六堆地域が八音の演奏が盛んだとされる。台湾の北西部に位置する苗栗で話を聞いた際には、結婚式や祭祀

<sup>1</sup> 謝宜文のまとめによる。

では八音が演奏されるが、葬儀では八音の演奏はされないということだった。他方、美濃では葬儀でも演奏がされると聞いた。台湾南部の儀礼の際の八音の研究においても、葬儀で八音が演奏されることが書かれている [e.g. 柯 2005]。

次に八音楽団の編成について見ていきたい。八音では多様な種類の管弦打楽器が用いられ、主要な楽器としては管楽器では、嗩吶や簫、弦楽器では、胡弦、椰胡、二弦、打楽器では、大鑼、小鑼、小鈸、堂鼓などがある(写真 4)。中でも最も重要な楽器だとされるのは嗩吶である。嗩吶は日本では「チャルメラ」という名で親しまれている楽器である。葦を削った2枚の板(リード)で音を鳴らす縦笛であり、中国大陸を中心に幅広い国や地域で、少しずつ形を変えながらみられる。嗩吶奏者はその大きな音で楽団を先導するリーダー的な存在であるとみなされ、八音楽団の名前には、しばしば嗩吶奏者の名前がつけられる(写真 5)。



**写真 4** 台中市石崗区の土牛客家文物館における八音の展示 (2022年9月7日、筆者撮影)

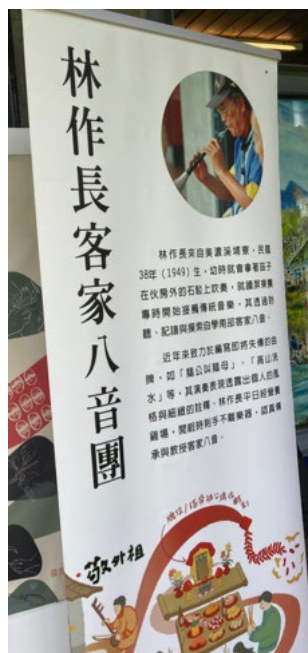


写真5 美濃客家文物館の八音楽団紹介（2022年9月9日、筆者撮影）

八音において唢呐は欠かせないが、その他にどのような楽器用いられ、何人で演奏されるかといったことも地域によって差がある。特に南部と北部の演奏形態の違いは顕著である。南部の美濃では伝統的に、唢呐1人、椰胡2人、打楽器1人の計4人で演奏される。美濃で八音楽団の演奏者に聞いた話では、結婚式や祭祀では四人で演奏されるのに対して、葬儀ではもともと3人で演奏されており、最近では1人で演奏することもあるという（写真6、7）。少ない人数で演奏する場合には、唢呐奏者が唢呐の演奏の合間に打楽器の演奏もするといったように、1人が複数の楽器を担当する。また湛敏秀によると、美濃を含む台湾南部の六堆地区では演奏人数は4人から6人であり、それを超えることはないという。それに対して、北部の八音は大人数で演奏され、桃園では唢呐は最低でも2本、多い時は4本以上であるという〔湛2001〕。北部では、北管と呼ばれる比較的大きな編成の合奏音楽の影響があり、八音楽団が北管の演目を演奏することもあると聞いた。



写真 6・7 美濃客家博物館における温福仁客家八音の演奏。右の写真は唄吟奏者が打楽器を演奏する様子（2022年9月9日、筆者撮影）

### 三 八音と感情

今回の調査で耳にし、また先行研究でも述べられている八音の特徴として、その演奏がそれぞれの儀礼において喜怒哀楽を表現することが挙げられる「e.g. 湛 2001」。筆者が八音の説明を聞いている際に、例えば「悲しい音楽」といったように、感情を表す語彙によって語られることがしばしばあった。特に客家の結婚式と葬儀の演奏は対照的な感情的特性を持つものとして捉えられている。音楽と感情の関係については、西洋音楽を中心に哲学や心理学、美学、認知科学など様々なアプローチから研究がされてきたが、伝統的な儀礼の音楽を担う演奏者から、音楽の感情的な表現が重視されていることは興味深い。

今回の調査で話を聞いた八音楽団の唄吟奏者は、葬儀と結婚式や神祇祭祀では曲調が異なることを指摘する。彼は結婚式や神祇祭祀の八音の演奏は、音高が高く、テンポが速く、明るい曲調である。一方、葬儀では、テンポは遅く、音高は低く、悲しい曲調だという〔河合、田井他 2023〕。劉怡君〔2015〕によると、こうしたことは、八音を先導する楽器である唄吟の「配管」違いにも表れる。「配管」とは、「調式」つまり旋法<sup>2</sup>のことであり、八音の演奏では、演奏機会や曲ごとに「管」が決まっているのだという。例えば、「工管」と呼ばれる旋法の演奏を聞くと人びとは葬儀を思い浮かべる、といったように、それぞれの「管」ごとに位置付けがなされているという。その一方で、鄭榮興〔2000〕は熟達した演奏家の手にかかると、どんなに「悲しい管」を用いても、喜びをもって演奏することができる

<sup>2</sup> 音階を形成する一定の音組織。音階と混同されることがあるが、田辺尚雄は音階には基本音列的な意味を、実用音列的な意味を持たせている〔音楽之友社 1966〕。

も述べる。八音による感情の表現は、楽曲や「管」の違いによるだけでなく、それを表現する演奏者の技量にかかっているのだ。また、湛敏秀 [2001] の調査によると、佳冬八音團團長の林彦香は、八音は葬式では弔いの音楽を演奏して遺族の涙を引き出すなど、感情を呼び起こすものだと言ったという。ここからは、八音が感情的な表現をすることの先には、儀礼において人びとのいかなる感情を引き出すかが意識されていることが窺える。

客家八音は、客家人が巡りゆく自然の中で土地を開墾し、農作業にいそしみ、神や祖先の加護に感謝する儀礼をおこなうなかで生まれてきたものだという [曾萃玫 2013]。それは客家人の生・老・病・死の音楽文化を軸に、客家人の人生経験、喜び、悲しみを表現する [古芸禎 2011]。このように、客家八音は人びとの人生儀礼、神や祖先を祀る祭祀と深く関わり、切り離せないものであった。

#### 四 現代的变化と感情の行方

しかし、近代化の影響を受け、八音をめぐる状況は変わってきているという。美濃で伝統文化の保存や地域活性化のための運動に携わる F 氏（男性）によると、20 世紀後半以降、台湾政府が海外文化の導入を推奨したこともあり、八音は「古いもの」だとみなされるようになっていった。その一方、西洋的な音楽、ポピュラー音楽が「かっこいい」ものとして受け入れられていったという。そのようななか、儀礼においても八音の演奏機会が失われ、西洋的な音楽や中国の合奏音楽に代わられていった。注目すべきは、日本の歌謡曲も結婚式や葬儀においてしばしば演奏されているということである。そうしたポピュラー音楽の演奏に使用する楽器は、フルートやドラム、サクソ、トランペット等であるという。

葬儀と結婚式や神祇祭祀における八音の曲調が異なることは先に述べたが、西洋的な音楽や日本の歌謡曲を用いる場合にも、各儀礼による曲調の違いが意識されている。例えば、日本にも縁のある曲だと、葬儀では「蛍の光」と同じ旋律の曲「驪歌」や「慈しみ深き」などの悲しい曲調の曲、結婚式では、テレサテンの曲など明るい曲調の曲が用いられるという [河合、田井他 2023]。

冠婚葬祭などの儀礼における音楽が、宗教的なもの、その地域に根付いた慣習的なものから、脱地域的・世俗的なものに変わること自体は、台湾客家に限った傾向ではない。近年、日本やヨーロッパにおいても、結婚式や葬儀の際の音楽が、宗教的なものから、ポピュラー

音楽などの世俗的なものに変化していることが指摘されている [e.g.田井 2020, Van der Smissen 他 2019]。日本では、結婚式でポピュラー音楽が用いられることは、いまや当たり前のこととなっているが、近年、葬儀においてもポピュラー音楽やクラシック音楽を用いることがある。無宗教葬において「音楽葬」という音楽を中心とした葬儀が行われるのみならず、仏式の葬儀でも、読経以外の場面でポピュラー音楽、クラシック音楽などを生演奏する演出が行われている [田井 2020]。ヨーロッパにおいても葬儀の音楽が、宗教的なものやクラシックから、ポピュラー音楽に変化してきていることが指摘されており、例えば、オランダのある葬儀場では「オンラインプレイリスト」が導入され 3500 もの楽曲の中から故人や遺族が曲を選ぶという [Bruin-Mollenhorst 他 2018]。日本やヨーロッパのこうした変化の背景として、人びとの死生観や宗教観の変化が挙げられている [Caswell 2011; 田井 2020]。つまり、人生の節目において拠り所となるものが、既存の宗教や地域の慣習から、日常的に親しんでいる音楽へと徐々に移行してきているのではないかということである。

一方、F 氏の語りには、八音の過渡期において儀礼を行う際の葛藤が見られた。彼が結婚式を行った 2000 年ごろには、結婚式当日の儀式ではポピュラー音楽の楽団だけ呼ぶことがほとんどだったという<sup>3</sup>。しかし彼は「八音を捨てたくはないが、ポピュラー音楽の楽団がないと楽しくない」という思いから、両方の楽団を呼んだ。そして、結婚式当日には、どちらがどの場面で演奏するかで喧嘩をした [河合、田井他 2023]。先述したように、伝統的な音楽である八音と西洋的な音楽の双方が、葬儀や結婚式、祭礼において、その機会にふさわしい感情を表出し、そのことによって人びとの感情に訴えかけることが期待されている。一方で、宋廷棟が八音とポピュラー音楽の両方が必要だと語ったことから、八音とポピュラー音楽のそれぞれの位置付けの違いが意識されていることが窺える。

柯佩怡 [2005] の調査における、八音楽団と西洋的な音楽の楽団の双方が呼ばれた美濃のある葬儀の事例は、儀礼での八音とポピュラー音楽に対する人びとの意識の違いについて示唆的である。その葬儀では、場面ごとに八音楽団と西洋的な音楽の楽隊の演奏する場面が分かれている。「三献礼 (三献禮)」を中心に、主祭者が決められた手続きで儀礼を行う各プロセスでは、そこに組み込まれる形で八音が演奏されるが、その儀礼の前後や火葬時にはポピュラー音楽が演奏されている。こうしたことから柯佩怡は、八音は儀礼の進行において

---

<sup>3</sup> 台湾では結婚式の前日に新婦方の祖堂に赴き新婦方の祖先を参拝する「敬外祖」の習俗がある。その際には、現在でも八音が行列の船頭をするが [洪馨蘭 2015]、録音代用されることもある。前日の儀式では今でも八音が演奏されることが多い



必要であり、ポピュラー音楽は「雰囲気」を作るという役割の違いがあるという。近年、結婚式や神祇祭祀では部分的に八音の演奏の録音を使用することが増えているようだが、今回聞いた話によると葬儀では必ず生演奏で行われるという。この理由としては葬儀の中心的な儀礼の各プロセスと密接に八音が関係していることにより、録音や西洋音楽では代替できないものとなっていることが考えられる。

このように八音は、台湾客家の儀礼において中心的な役割を果たし、またそれだけでなく、客家の人びとの「捨てられない」思いゆえに、変化の波にさらされながらも、部分的に形を変えながら継続されている。F氏によると、一度は衰退の道を辿った八音だが、2000年ごろからは、政府の方針もあり八音の復興運動が盛んに行われているという〔河合・田井他2023〕。こうした状況について、様々な変化にさらされているからこそ、客家人の精神的支柱として、八音が重要なものとなっているともいえるだろう。一方、柯佩怡〔2005〕が八音と西洋的な音楽との融合はいまや美濃地域の葬儀文化の一部となっていると述べるように、その継続性の中で、西洋音楽が取り入れられ、現代の客家の人びとの感情に寄り添いながら新たな文化を形成している。鍾兆生〔2017〕は、人々が神々や祖先がつながるための客家の儀式において八音は不可分であり、象徴的な意味を与えられているだけでなく、その響きによってそうしたつながりを体現するための具体的な手段であるという。それを考えたときに、本稿で述べてきたような変化が台湾客家の人々の死生観や宗教観、冠婚葬祭等の儀礼生活全般において何を意味するのか、引き続き調査をする必要がある。

## 謝辞

本調査報告は、海域アジア・オセアニア研究 プロジェクト経費で実施した河合洋尚・横田浩一・奈良雅史・神宮寺航一・渡邊泰輔・田村あすかの共同調査の成果による。今回の調査では、客家文化センターの協力や茄苳文史協会や美濃愛郷協進会などの協力を得て、台中市の新社区白冷圳、石崗郷、大茅埔、屏東県水埤郷建功村、屏東県佳冬郷および高雄市美濃区を訪れた。また、幸運にも美濃客家博物館では、温福仁客家八音と林作長八音団の演奏を聴くことができ、屏東県佳冬郷の楊家では茄苳文史協会の楊景謀氏の計らいで鍾聰明屏東縣八音協會の方々に八音と山歌等、客家伝統音楽の演奏をご披露いただいた（写真 8）。石岡郷でも客家音楽の演奏家の方が山歌の弾き語りを聴かせてくださり、山歌と八音に用いる楽器について説明をいただいた。短期間ではあったが充実した調査となり、このような機

会をご準備いただいた河合先生をはじめとする先生方、通訳等で助けてくださった院生のみなさま、上記に書ききれなかった、台湾でご助力いただいたすべての皆さまに感謝申し上げます。



**写真 8** 屏東の楊家での演奏。屏東八音協会の楽団による山歌の演奏の様子（2022年9月9日、渡邊泰輔撮影）

#### 参考文献

音楽之友社編 1966『標準音楽辞典』音楽之友社。

河合洋尚・田井みのり・渡邊泰輔・田村あすか 2023（掲載決定）「現代に生きる『伝統』——台湾客家地域の音楽・民居・社区景觀『客・観』4。

田井みのり 2020「死と音楽——現代日本における『音楽葬』の付置」東京都立大学修士学位論文。

Bruin-Mollenhorst, Janieke. Hoondert, Matin.J.M. 2018 Musical Media in Dutch Crematoria,1914-Present. *THANATOS*7: 6-31.

Caswell, Glenys. 2011-2012 Beyond Words: Some Use of Music in the Funeral Setting. *OMEGA* 64(4): 319-334.

Van der Smissen, Doris. Steembakker, Margaret A. Hoondert, Matin J.M. Van Zaanen Memmo M.2019 Music and Cremation Rituals in The Netherlands: A Fine-Grained Analysis of Crematorium's Playlist. *Digital Scholarship in the Humanities*, 34 (4): 806-817.

- 曾 萃玫 2013「六堆地区客家八音文化伝承探討以『大夥房芸術団』為例」国立屏東科技大学碩士論文。
- 古 芸禎 2011「国民小学推展客家八音教学之研究——以苗栗地区三所学校為例」国立新竹教育大学音樂学系碩士論文。
- 洪 馨蘭 2015『敬外祖——台湾南部客家美濃之姻親關係與地方社会』国立中央大学出版社。
- 柯 佩怡 2005『台湾南部客家三献礼之儀式與音学』台北：文津出版社。
- 劉 怡君 2015「台湾客家八音嘖呐的管路與活奏之研究——以吹場樂〈新義錦〉為例」国立新竹教育大学音樂学系碩士論文。
- 湛 敏秀 2001「吳招鴻(阿梅)之新興八音団及其客家八音技芸研究」国立芸術学院音樂学研究所碩士論文。
- 鄭 榮興 2000「客家音樂的管路與線路」『彈音論樂』pp.262、台北：高談文化。
- 鍾 兆生 2017「遺產化過程中美濃客家八音與地方常民生活關係之研究」客家委员会獎助客家學術研究計畫。
- 蕭 興華 1998『中国音樂史』台北：文津出版社。
- 謝 宜文 2017『美濃地区——客家還神祭典与客家八音運用』行政法人高雄市立歷史博物館・晨星出版有限公司。

(たい・みのり 東京都立大学大学院)